



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4401 号 2018.5.26 発行

「万引き家族」 言葉でたどる注目点
フランスのカヌヌ映画祭のコンペティション部門で最優秀賞のパルムドールを受賞した、是枝裕和監督の『万引き家族』。日本の作品がパルムドールを受賞するのは21年ぶりの快挙です。作品への関心は日増しに高まり、来月8日からの公開を前に、先行上映も決まりました。世界が認めたこの映画、どこに注目すればいいのか。監督の言葉などをもとに探ります。(科学文化部記者

NHK ニュース 2018年5月24日



岩田宗太郎)

家族の形を問い直したい

『万引き家族』は、東京の狭苦しい古民家で暮らす6人の物語です。

一家があてにするのは、樹木希林さん演じる祖母が受け取る年金。足りない分は、父親(リリー・フランキーさん)が息子(城桧吏さん)とともに万引きをして補っています。

「ふだんなら犯罪者として切り捨ててしまうような、私たちがあまり考えないような人たち」と是枝監督が表現する家族の暮らしぶりが、丁寧に描き出されています。

物語は、父親が、虐待を受けていた少女(佐々木みゆさん)を家に連れて帰るところから始まります。安藤サクラさんが演じる母親は、この少女を実の娘のように迎え入れ、物語の途中、「子どもは親を選べないが、子どもが親を選んだほうが家族の絆が強い」という

意味のせりふを言います。

この「絆」という言葉が東日本大震災以降、よく使われてきたことに対し、是枝監督は次のように語っていました。

「絆という言葉は、本来的に言えば血縁を超えた共同体としての絆というところに向かうべきだと思うけれど、『家族は強い』とか『血縁』とか、なんとなく着地としては『家族っていいよね』という物語があふれたように思う。そこに対する違和感が僕の中にずっと残っていた。家族の形をゼロから問い直したい」（カンヌ出発前のインタビューで）



この作品を含め、「家族の形」は是枝作品のテーマの1つとなっています。是枝監督は、『そして父になる』では6年間育てた息子が病院で取り違えられた他人の子どもだとわかった2組の夫婦を、そして『海街diary』では母親の違う妹と一緒に暮らすことになった姉妹の物語を描きました。

インタビューで是枝監督は、今回の作品について「母はいつ母になるのかが、物語の1つの軸」「自分の子どもではない子どもを育てながら、父親や母親になりたいと思う、そういう人たちの話をやろうと思った」とも語っています。

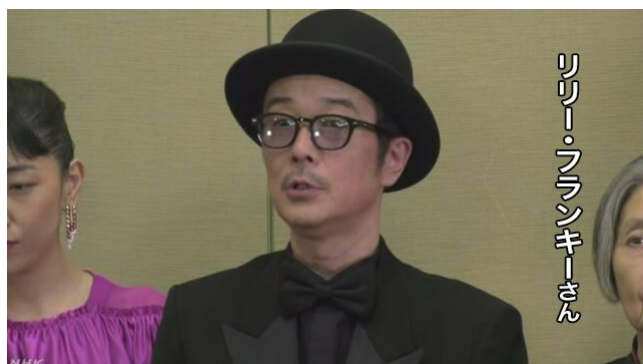


本当の家族のように

「万引き家族」の出演者のうち、樹木さんとリリーさんは是枝作品の常連です。そこに安藤サクラさんと松岡茉優さん、それに子役の2人が加わり、休憩時間もいつも話をしているような家族となりました。

リリーさんは、是枝監督はそうした俳優どうしのやり取りを常に観察し、台本に反映することもあったと話します。

「どこまで撮っていてどこまで撮ってないのか、どんどん分からなくなってくるんですよね、そういう空気を是枝さんが作ってくれるんで。ことしの1月まで、あばら屋の中で貧しい家族を演じていたんですけど、そこからレッドカーペット。飛距離がすごいというか、映画よりも映画的なことが起きてしまった」（21日のNHKの番組で）



一方、是枝監督には、俳優たちへの感謝の念が。

「今回は、役者のアンサンブルがともうまくいった。非常にバランスのいい形でメインの6人が集まり、どの瞬間も皆さんのお芝居がほれずるぐらいで、みんなが相手のお芝居をきちんと受けられるという状況で、監督として恵まれた環境で撮れたというのがすごく大きかった」



(23日の帰国後会見で)

審査員をとりこに

この作品をパルムドールに選んだことについて、審査員長でハリウッド女優のケイト・ブランシェットさんは「俳優の演技と監督の思いが見事に合致している」などと説明しています。是枝監督はその後、中でも安藤サクラさんの演技に対する評価が高かったと明かしました。



実生活では去年6月に長女を出産した安藤さん。映画では他人の子どもを育てる母親として、監督の言う「母はいつ母になるのか」を体現しています。「審査員の女優たちはみんな、彼女のお芝居、特に泣くシーンの芝居がとにかくすごくて、『もし私たちがこれから撮る映画の中であの泣き方をしたら、安藤サクラのまねをしたと思ってください』とおっしゃっていました。

彼女の存在感が審査員をとりこにしたんだと、よくわかりました」(23日の帰国後会見で)

そして作品を印象づけているのが、2人の子役の自然な演技です。

是枝監督は子役の城桧吏さんと佐々木みゆさんには台本を渡さず、その場でせりふを伝えたと言います。これまでも続けてきた手法ですが、今回の作品は、子どもたちの成長や葛藤が話の展開に大きく関わってくるだけに、2人の演技も高い評価を受けました。



「台本は渡していないので、簡単な状況だけ説明して、あとはその場その場でせりふを渡していく。桧吏くんは非常に勘のよい子だったので、撮影が進むにつれてストーリーがどうなるのか頭の中でパズルを組み立てていっていましたし、撮影というものをどんどん理解するようになっていた。そういう成長のプロセスを映画の中に残せたというのはとてもよかった」(カンヌ出発前のインタビューで)



れながら、あの家族を見ていく。その後半の展開を、逆に家族から僕らが見返されるといふ形に転じてみよう」と(21日のNHKの番組で)

どうやら途中で事件があり、家族の秘密が明かされていく。そのなかで、家族の形や絆について、見る人の考えや価値観が問われたり揺さぶられたりすることになりそうです。

是枝監督が「積み重ねてきたものが出せた」と自負する映画「万引き家族」は、来月2日

僕らが見返される形に

気になる話の展開ですが、予告編の後半部分には『次々と明かされていく、家族の秘密。彼らが盗んだのは、絆でした』というナレーションが。

そして是枝監督は、ストーリーについて次のように語っています。

「見た方が、共感しつつも、でもやっていることは悪いことだとアンビバレントな(相反する)感情に引き裂か

と3日に先行上映が行われたあと、8日から全国で公開されます。

「万引き家族」 専門家 “家族や社会の在り方問いかける作品”

NHK ニュース 2018年5月25日

71回目となったことしのカンヌ映画祭では是枝裕和監督の作品、「万引き家族」が日本の映画として21年ぶりに最優秀賞のパルムドールを受賞しました。その快挙の瞬間を現地で目撃した専門家は、作品について「子どもの貧困など社会問題に踏み込み、家族の形や社会の在り方を問いかけている」と評価しています。

映画研究が専門で、立教大学異文化コミュニケーション学部のイ・ヒャンジン教授は、毎年カンヌ映画祭を訪れていて、ことしも現地で20本以上の作品を鑑賞しました。

このうち「万引き家族」は14日に、上映前の映画館の前に1時間近くも並んで見たといいます。

イ教授の話では上映前から高い人気を集め、当初から「受賞するのでは」と注目していたということです。上演時間は2時間でしたが、イ教授は、「貧困の家庭で生きる子どもたちの姿に元気づけられたり、体が傷だらけの少女の姿に悲しい気持ちになったりしながら見入った」と話していました。

出演者の名前を紹介するエンドロールが流れ終わると観客は立ち上がって拍手をおくり、鳴りやまなかったということです。

作品を見た、イギリスの友人や地元映画配給会社の関係者に感想を聞いたところ「すばらしい映画だった」とか「家族のことを考えるきっかけにしたい」などと称賛する声が続いてきたそうです。

そして、授賞式当日の19日。

イ教授はパブリックビューイング用に設置された、会場近くのスクリーンを見守りました。「万引き家族」がパルムドールを受賞したと発表されると、大きな拍手がわき起こったということです。

作品について、イ教授は「子どもの貧困など社会問題に踏み込み、映画を通じて家族の形や社会の在り方を問いかけている」と評価しています。

そして、「日本の家族で現実に行き詰っている問題を丁寧に取り上げたことが高い評価につながったのではないか」と話していました。

県庁舎福祉の店「かっぱ」がフェスタ

時事通信 2018年5月25日 埼玉

埼玉県庁のみどりの広場で「かっぱ21周年フェスタ」が16、17の両日に開かれた。「かっぱ」は県庁第2庁舎にある障害者の働く場所の創造、社会参加促進を目的とした店で、2日間で約430人が来場した。

【時事通信社】



展示 長期間入院する子どもたちの絵 35作品 静岡 / 静岡 毎日新聞 2018年5月25日

県内の病院で闘病生活を送る子どもたちの描いた作品を展示する「長期入院の子どもたちのためのアートワークショップ絵画展」が、ノアギャラリー（静岡市葵区伝馬町）で開かれている。入場無料で28日まで。



障害者によるアート作品の企画展などを行うNPO「アートコネクトしずおか」の主催。静岡てんかん・神経医療センター、県立こども病院、浜松医科大たんぼぼ学級の3病院の子どもらによる35作品が展示されている。

県ゆかりのアーティストが講師役を務めたワークショップで描かれたもので、家族や花畑、かき氷などをテーマにした作品が並ぶ。講師を務めたアートディレクターの山下博己さん(66)は「『一番興味のある物を描いて』と話すと、のびのびと描き上げてくれた」と話した。午前11時～午後6時。問い合わせはアートコネクトしずおか(090・2265・0370)へ。【大谷和佳子】

20年東京五輪・パラリンピック 強化選手指定、新たに27人3団体 /岐阜

毎日新聞 2018年5月25日

2020年の東京五輪・パラリンピックに向け、県は24日、新たに27人3団体を強化選手・チームに指定した。今年度分を含めて強化指定は五輪144人、パラリンピック30人10団体になった。

選手を代表し、ホッケー競技の福田健太郎選手が「メダルを獲得し、県民に夢と感動を与えられるよう全力で取り組む」と宣誓。パラリンピックのアーチェリー競技の服部和正選手は「障害者と健常者を結びつけ、共に生きる社会を目指し、精いっぱい精進する」と語った。

県は、県出身などゆかりの選手について、東京五輪30人、パラリンピック10人の出場を目指す。指定選手には強化活動費を交付するほか、科学的なサポートや基礎講習を受けられるよう支援する。期間は20年国体、冬季競技は北京五輪まで。

県庁で選手・団体に強化指定証を交付した神門純一副知事は「今後も物心両面で全力サポートし、一人でも多くのオリンピック、パラリンピアンが出るよう期待する」と激励した。【岡正勝】

強制不妊手術めぐり東京訴訟「和解も視野に」

朝日新聞 2018年5月25日

旧優生保護法(1948～96年)下で障害者らが不妊手術を強いられた問題で、国に謝罪と賠償を求めて東京地裁に提訴した男性(75)の代理人である関哉直人弁護士が24日、国会内で開かれた会合で国との和解を視野に入れていることを明らかにした。

会合は救済策を議論する超党派の議員連盟。議連会長である自民党の尾辻秀久・元厚生労働相からの「当事者は高齢なので早く答え(救済法案)を作りたい。和解は検討しているか」という質問に対し、関哉氏は「単刀直入に言うと、和解も視野に入れて対応していきたいと思っている」「人権救済を最優先にしてやっていきたい」などと答えた。

原告の男性は、教護院(現在の児童自立支援施設)に入所していた14歳ごろ、宮城県内の病院で不妊手術を受けたとされる。手術による身体の損害と、憲法が保障する権利を侵害されたとして、17日に国を提訴した。

また議連はこの日、救済策となる議員立法の策定に向け法案作成プロジェクトチームを立ち上げた。座長には立憲民主党の西村智奈美元厚労副大臣が就いた。来年の通常国会で議員立法の提出を目指す。(浜田知宏)

都内で急増！ 固定電話の転送サービスを詐欺に悪用 発信元隠しなどに有効か 行政機関や企業装う

産経新聞 2018年5月25日

固定電話の転送機能サービスを悪用した特殊詐欺が東京都内で増えている。詐欺グループが携帯電話を使っても、被害者には「03」などで始まる固定電話の番号が表示され、行政機関や企業からかけているように装えるためだ。警視庁は「相手の話をうのみに

せず、電話帳やインターネットで番号を確認してほしい」と注意を呼び掛けている。

「医療費の還付金がある」。昨年8月、墨田区に住む60代女性の自宅に、区役所の国民年金課の職員を名乗る男から電話があった。女性が翌日、男に伝えられた「03」から始まる番号にかけると、「現金自動預払機（ATM）に行ってくれば手続きを指示する」と告げられた。

女性は実際にATMを操作しようとした際、様子に気付いた巡回中の警察官に声をかけられて被害を免れたが、「本当に区役所からだと思ってしまった」と話した。警視庁によると、女性がかけた電話は転送され、男の使う電話につながっていた可能性が高いという。

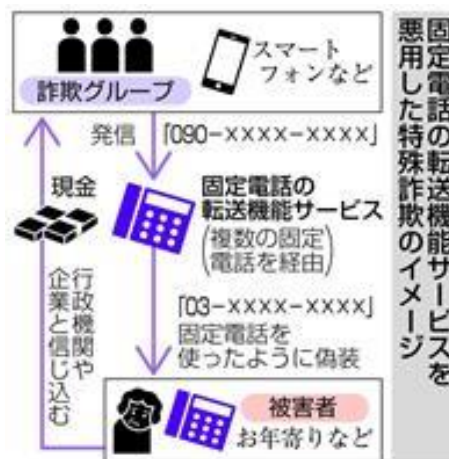
固定電話の転送機能サービスは本来、自営業者や会社員が外出している間でも、同じ番号を利用できるようにしたものだ。しかし、詐欺グループはこの特性を悪用し、発信元や身元を隠しているのに加え、複数の固定電話を転送させることで、番号から捜査の手が伸びるのを防ごうとしているとみられる。

警視庁によると、都内で発生した振り込め詐欺などの特殊詐欺で使用された電話番号を調べると、発信元が固定電話の番号だったのは平成27年の約5割から、28年は約7割に増えた。29年には3964件のうち3175件が固定電話で、8割に達するなど増加傾向が続いており、転送の手口が拡大していることがうかがえる。

固定電話が悪用される背景には、法律の不備もある。携帯電話が犯罪に使われたときには、携帯電話不正利用防止法に基づき、強制的に利用を停止できる仕組みになっている。これに対し、固定電話は番号を止められる明確な法令が存在していない。

大手通信事業者「NTTコミュニケーションズ」（千代田区）は28年12月、警視庁の要請に協力し、「大量の発信で、通信に障害が出た」として、特殊詐欺に使われたと指摘された約5900件に上る電話番号の解約に踏み切った。

被害増加に歯止めがかからない状況での苦肉の策だが、捜査幹部は「解約されたのは氷山の一角にすぎない」と指摘。警察庁や電波行政を所管する総務省、大手通信事業者は、詐欺に使われた固定電話の番号を速やかに停止できるようにする法整備や、ルール作りの検討を進めている。



信用失墜した財務省＝財政再建の機運後退も－森友記録廃棄で

時事通信 2018年5月24日

学校法人「森友学園」への国有地売却をめぐる、財務省が交渉記録を廃棄していたことが発覚した。度重なる不祥事を受け同省の信用が失墜する中、財政健全化計画策定に向けた政府・与党の議論が大詰めを迎える。負担増につながる財政当局の主張が国民の理解を得るのはさらに難しくなり、財政再建の機運が後退する懸念が指摘される。

健全化計画は政府・与党が6月にまとめる経済財政運営の基本指針「骨太の方針」の目玉となる。例年、各省庁は春ごろから骨太の取りまとめに向けた調整を本格化させるが、今年は財務省で3月上旬に森友学園関係の決裁文書改ざんが判明し、4月下旬にはセクハラ問題で福田淳一事務次官が辞任した。

さらに同省は今日23日、佐川宣寿前国税庁長官が理財局長時代に「廃棄した」と国会で答弁していた交渉記録の存在を一転して認め、この答弁を機に職員が実際に廃棄していた事実も明らかにした。骨太方針に全力を挙げるべき時期に多くの職員を不祥事対応に割かれており、同省のある幹部は「落ち着いて財政再建論議を進める環境にはない」とこぼ

す。

健全化計画では社会保障費をめぐり、過去3年よりも厳しい抑制を求めた財務省と、これに難色を示した厚生労働省の主張が折り合わず、具体的な金額の目標を盛り込まない方向となった。財務省の発言力低下を受け、焦点である基礎的財政収支の黒字化目標や消費税に関する文言が厳しさを欠いた表現にとどまれば、今後数年間の財政規律が緩みかねない。

自民党は24日、岸田文雄政調会長の肝煎りでまとめた財政再建に関する提言を正式決定した。岸田会長は同日の記者会見で、財政再建には有権者の協力が不可欠だと強調。一連の財務省の問題について「政府の信頼が問われているのは大変深刻だ」と懸念を示した上で、信用回復に向け、「(政府・与党を挙げて)反省し、再発防止を考え、責任を果たす」と決意を語った。

記者コラム 窓 でこぼこ

中日新聞 2018年5月25日

小学生時代、皆と会話や行動のテンポがうまく合わないが、歴史の話になると冗舌になり、豊富な知識を教えてくれる同級生の男の子がいた。後に発達障害だったらしいと伝え聞いた。先日、金沢市内であった大人の発達障害の当事者の集い。参加者からは「偏見が怖い」「できないことは多いけど、得意なことを生かせる場がほしい」と、切実な声が次々に寄せられた。思わずはっとさせられる言葉も。「誰だって、人として“でこぼこ”があるのにね」振り返れば、同級生の彼の抜群の記憶力はうらやましかった。それなのに、私たち同級生は「ちょっと変わってる子」と思いがちだった。悲しませたこともあったのかもしれない。いつも一人で本を読んでいた彼。大人になった今、どう過ごしているんだろう。(太田理英子)

もう一度花咲かせよう 「MeToo」と若き日の悔恨＝残間里江子

毎日新聞 2018年5月25日

欧米を中心に、セクシュアルハラスメントや性的虐待の被害を告発する「MeToo」運動や、被害の撲滅を訴える「Time's Up」運動が話題になっている。日本でも女性国会議員がハリウッドの女優たちに倣って黒い服を着て国会に登院したが、大きな広がりを見せたとは言えなかった。

それでも日本にも実名で被害を告発する勇気ある女性が出てきたことは、私のような旧世代の「働く女性」からすると隔世の感がある。最近、同世代の働く女性たちと腹を割って話したら、多かれ少なかれセクハラに遭った体験を持っていた。

もちろん当時はセクハラという言葉はなかったし、男性の認識も希薄だったから、告発はおろか、親や友人に話せなかったという人が大半だった。

還暦を過ぎた女性たちは自戒を込めて言う。「抗議をしても女の側に隙(すき)があったと思われるのがオチだったからね」「お酒の席で冗談のような感じで体を触ってきたり、わいせつな話をしたりする男性が多かったよね」「男なんて所詮こんなものじゃないの」と、あきれつつも諦めていた節もあるわ」

かくいう私ですら、今ならセクハラと判断されるような体験はなきにしもあらずだ。

内心は怖くて震えていても「いつも元気な丸顔娘」としては、騒ぎ立てるより男性の乱心を笑い話にしたほうが良いと判断し「アッハハ、ご冗談を！」と、大笑いをしてその場をやり過ごすという脆弱(ぜいじゃく)な戦術で乗り切ったが、一人になってから涙がこぼれたことを思い出す。

「男女共同参画社会」を推進する立場にいたのに、強い立場にいる男性に対して言うべきことを言わないできた若き日の悔恨を、これから活躍が期待されるワーキングウーマンの一助にしたいと切に願っている。(プロデューサー)

論説 是枝氏のカンヌ受賞 評価された弱者への視線 佐賀新聞 2018年5月25日

映画には世界の人々の心をつなぐ力がある。

そう実感させてくれたのが、是枝裕和監督「万引き家族」が第71回カンヌ国際映画祭で最高賞のパルムドールを受賞というニュースだった。

ベルリン、ベネチアと共に世界三大映画祭といわれるカンヌ映画祭で、日本映画が最高賞を受賞したのは5作目。今村昌平監督「うなぎ」以来、21年ぶりの快挙だ。

是枝監督は55歳。カンヌのコンペ部門だけでもこれが5本目の出品。2004年の「誰も知らない」で男優賞、13年の「そして父になる」で審査員賞を受賞している。

1950年代から世界で評価されている黒沢明、溝口健二、小津安二郎らの巨匠監督や、70年代以降に海外で認められた大島渚、今村監督らの後を継ぐ、日本映画を代表する実力派監督だ。

そうした意味では、「万引き家族」の最高賞受賞は、決して意外な結果ではない。審査員長のオーストラリア出身の女優、ケイト・ブランシェットさんが「演技、監督、撮影など総合的に素晴らしかった」と評価したように、完成度が高いウエルメードな作品であるのに加え、映画のテーマが、「女性のカンヌ」といわれた今年の映画祭の問題意識と響き合ったことも、受賞を後押しした。

受賞作の主人公は、東京の片隅で、祖母の年金に頼って暮らす、父母、息子、母の妹らの“家族”。生活力のない父は息子に万引のテクニックを教え、必要な日用品を調達している。だが、平穏な暮らしはある事件をきっかけに暗転。家族の秘密が明らかになっていく。

是枝監督自身の言葉を借りれば「今の日本社会の中で隅に追いやられ、見過ごしてしまうかもしれない家族の姿を可視化した作品」が、なぜ審査員の心を捉えたのだろう。

「誰も知らない」で親に置き去りにされた子どもたちを見つめた是枝監督は、「万引き家族」では、親に虐待される幼い子どもを重要な役に配した。両作品に共通するのは、セーフティーネットからこぼれ落ち、“見えない存在”になってしまった弱者への優しい視線だ。

おそらく、それが、レッドカーペットの階段にブランシェット審査員長ら女性たちが集まり「女性の映画監督が極端に少ない現状を改革しよう」と訴えた「女性のカンヌ」の精神と、共鳴したのだろう。9人中5人が女性だった審査員からは「私たち全員がこの映画と恋に落ちた」という言葉も出たほどだった。

宗教対立、テロ、難民問題、保護主義、格差社会…。映画は、世界を覆う深刻な問題を解決する力を持っていないかもしれない。だが、そうした困難な現実の中で懸命に生きる人々を描くことによって、出会ったこともない異国の人々の心を動かす力を持っている。

「対立している人と人を、隔てられている世界と世界を、映画がつなぐのではないかという希望を感じます」。授賞式で是枝監督はこう語った。

「万引き家族」は、既に110を越す国と地域での配給が決まっており、是枝監督の次作は海外の大物俳優との作品になるといわれている。

家族を血縁で美化せず、犯罪でしかつなげられなかった家族の優しさを描いた映画が、世界中に広がっていく。排除ではなく受容すること。映画に込められたメッセージが、人々をつないでいく。(共同通信・立花珠樹)

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

